宗像

毎月一日発行
発行所
宗像大社
宗像
福岡県宗像郡玄海町
電話 神湊 代表26番
定価一年送料共 500円

宗像大社復興事業

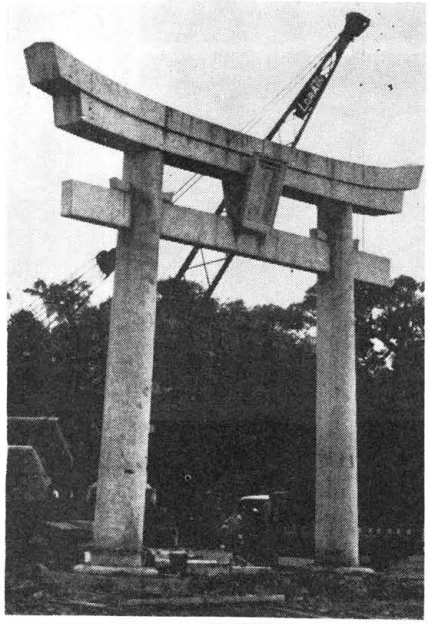
大鳥居表参道に移設

—先代の意志をつぐ麻生太賀吉氏—

貴賓館は上棟了ゆ

境内の桜花も散り、宗像の神苑は今萌え立つ若葉の香りに包まれているが、この新緑の中で、復興工事は今夏の完成を目指して急ピッチで進められている。工事は当初計画通り順調に進捗しているが、この頃、本計画に錦上花を添えるものとして、表参道に大鳥居の移設が決定した。

従来、当社への参拝車輌は、神社側面から神門前まで参入していたが、この度の復興計画により境内への車輌進入を一切禁止し、代りに神社前面に新設の大駐車場に全車輌を収容し、参拝者は総て、正面から徒で境内に参入するという神社本来の姿にたちかえることになった。従ってこれ迄、比較的利用度の少なかった表参道が、今後は主参道として大きくクローズアップされ、その整備が急がれているが、近く、五百枚に及ぶ御影石が敷きつめられ、沿道の植栽と相俟って、主参道に相応しい体裁を調えることになっている。



こうした表参道の明示と、ひいては神社の象徴的表示を目して、参道入口に大鳥居が建設されることになった。これは、現在東参道ロータリ広場に建立されている大鳥居を移転建設するものであるが、この鳥居は、以前、国道三号線沿いに郷橋脇の県道入口に建立されていたもので、先年現在地に移設、今回再度の移転をみるものである。

この大鳥居は、昭和八年、当時九州水力電気社長をされていた麻生太吉氏の奉献によるもので、石の鳥居としては九州最大の威容を誇り、また崇敬厚かった海軍大将加藤寛治閣下の揮毫になる額面「宗像神社」名と共に、当社のシンボルとして郡内民子は勿論、遠来の参拝者にも永く親しまれてきたものである。しかし、近年車輌の激増により、交通障害を来たすとして当局より撤去の御告を受け、やむなく昭和四十一年十二月現在地に移転建設したが、これより先、昭和三十年にも、東郷駅東口に建立されていた鳥居の撤去を余儀なくされ、遂に国道三号線より当社に通ずる二つの主要道路入口の鳥居は相次いで姿を消すに至ったのである。

先般、当社久保宮は、祈願殿建設に引続く境内復興整備工事の進捗状況を写した航空写真を携えて上京、麻生太吉氏の御子息、麻生セメント株式会社社長麻生太賀吉氏と面談し、写真で復興事業の概況を説明し、先代御奉献の大鳥居を表参道入口に一ノ鳥居として移設頂くよう依頼したところ、快く協力を約され、近く同社の手により解体移転が行われることになった。この鳥居は高さ約八尺五十糎、笠木の巾約十二尺、重さ約五十トンに及ぶ巨大なもので、移設に当っては、抗打ちによる強固な土台作りを始め、解体、運搬、組立てと技術的に当分困難が予想される。現在、同社より担当者が再々来社され、現地を調査し、慎重に計画中であるが、やがて、当社正面玄関に相応しく、あの懐かしい威容を現わす日も間近いことであろう。

写真上は昭和四十一年十二月に東郷橋わきより当社境内の現在地に移設された折の写真であるこれでみると巨岩の大きさがよくわかる。

写真右は建設中の貴賓館。屋根もでき、いまは内部工事がなされている。

神具、装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
九州店
福岡市吉塚一丁目三番三号（〒八二二）
電話福岡（〇九二）六五一九四五番
本社
京都市下京区油小路六条北入（〒六〇〇）
電話京都（〇七五）三三一一三四・六六六番

「沖津宮現地大祭申込みについて」

毎年五月二十七日、筑前神島鎮座宗像大社沖津宮に於いて、日本海々戦記念日をトして国家鎮護祈念の現地大祭が斎行されます。

渡島に際しては毎年海上保安庁の御好意により巡視船に便乗させて戴いておりますが、乗船名数に制限があり、今年は早くも五月十日以前に其の数を上回る状態でした。本年はこの様なわけで申込受付を〆切りましたが、来年からの参加御希望のお方は少なくとも四月までに参加したい旨を神社まで御一報下さいます様お願い致します。

その御一報に接しましたら、係が正式申込書を、参拝要項を御送付申し上げます。正式申込書は先着順に受付け致し、参加の諾否の御通知を各位に致します。

尚御参拝希望のお方は参拝要項を充分お含み置きのうお申込みいただくことになります。

以上、申込みの方法などについてお知らせ致しておきます。

付記

一、参拝者は沖津宮大祭奉賛会費として一名千五百円を納めて頂きます。

一、大島に前日斎泊して頂きます。宿泊、食事等は各自個手配等準備願います。

一、遊山、魚釣等を目的とした参拝者はお断り致します。

論説　経済成長と民族の心

現代わが国の経済面の著しい成長は、世界の注目するところである。去る大戦に敗れて、窮迫のどん底にあえいだ独逸や日本が、急速に立ち直って、勝利の国々を浸く繁栄は、たしかに驚異であろう。それは外国の嫉視をまねいてもいよう。

そこに外国の怨恨や非難も起る。曰く「軍国主義が復活しつつある」と。曰く「経済侵進国の援助など全く考えないエコノミック・アニマルだ」と。

先ほど、諸外国の誤解や危惧をうち消すために、政府は「経済大国となっても、軍事国家の道は選ばない」と声明したことがある。憲法第九条の解釈はともかく、戦争の悲劇につながる危険を好まぬ国民多数が、この方針には賛成であろう。

こうした声明を出す必要のある程、世界の注目を集めているわが国経済の成長ぶりは、その基礎を何においているか。今日一国の財政から家庭のやりくりに至るまで、常用されている経済という語句は、元来中国の古典に見える経世済民から出ているが、政治をはじめ各方面の現状は、国を治め民を救う意味の経済の要諦にかなっているであろうか。

国運の進展より急利覚略、次代のための人作りよりも時流迎合、勤労の尊さを考えるよりも賃銀斗争。良心麻痺、風俗紊乱の風潮が、経済繁栄の陰に助長されてきた点に、思いをめぐらすと、政治教育企業などへの概観は、いずれも愛国心欠如の残念な結論に達するのである。

ある経済評論家は、一体今日の経済成長は誰が成し遂げたか、現代の各界指導層の中で、最も真面目な考え方と最も真剣な努力を堅持しているのは、産業人であると、その因素を加えて指摘している。そして選挙と政争を政治の生命と心得る政治家、教壇労働者を自認する教育者、闘争破壊に専念する組織指導者などは、経済成長の功績はとして、ましてや秩序無視、道義頽廃を意に介せず、軽薄な世相におもねる自称文化人に至っては、国家の繁栄にいささかも貢献してはいない識く識者もある。産業人の忍耐と精励が、繁栄をもたらした結果と言うに、賛成せざるを得ない。

然し、わが国の経済発展的な繁栄を遂げて、経済的大国となることに成功しても、これが正常な民族精神の基礎によって支えられない限り、安定した真の繁栄と喜ばない。

物質偏重の利己主義と国民的な享楽主義が蔓延し、対立抗争の渦を巻きおこす破壊主義を横行しては、経済大国となっても一時的な砂上の楼閣、民族永遠の繁栄につながるものではなかろう。健全な民族精神を抹殺し、法秩序を破壊して、赤色革命の劫火に祖国を焼き尽くそうと狂奔する暴逆の企図は、平和国家への産業人の努力を、烏有に帰する危惧がある。

愛国心といえば、直ちに復古調とけなし、新しい時代を理解しない錯誤と排斥したがる急進革命論こそ、憐れむべき近視眼的稚説であろう。共産諸国の現状を見れば、その指導者の苛酷なまでの政治的制約の旗印のもとに、愛国心を結集している。強大な軍事力、覇道的な拘束力が、自由な言論結社を許さない国情を、率直に認めなければなるまい。

最近韓国の若い新聞記者が、帰国談の中に強調している言葉は、農村の純朴さが実にいい、飾り気のない農民の姿に、心をひかれたとの述懐である。この記者は、彼の地の農民がよく指導者の指図に従い、抗争も意恨もなく素直に働いている光景を、わが国の現状とひきくらべて賞讃しているが、若い戦前のわが農村を知っている人が見たら、もっと深い感慨を持ったであろう。

近代産業の発展が、経済大国の希望を強めてはいるが、反面に固有の美しい民族性を歪めて、日本の心を不良化させつつある傾向も認めねばならない。道義心低下の暗い影は、対立抗争によって濃くなり、特に義理人情の軽薄化は、国民的悲劇と称し得る公害かも知れない。よきもの美しきものを、悉く失う危険のある心性公害は、現実に益々横行する傾向を見せている。各界の指導者は果敢な勇気を振るい起して、日本の心を取り戻すことに努力を惜しんではならない。

エコノミック・アニマルなりのありがたくない名前は、名付け親のパキスタンのブット氏に返上したいものである。

× ×

阿蒙少言

若い夫婦が、自家用車を走らせて、銭湯にゆく。この場合二人にとっては、銭湯は安価なレジャーそして家庭会話の娯楽である。浮世床に限らず、古くから庶民に親しまれた浮世風呂は、放送・討論・情報の有力な社会的役割をになっていた。中年女の亭主こきおろしの大声が、壁をくだった男湯まで筒抜け、苦笑しながら洗っ中年男には、よき反省の機会ともなる。銭湯は教育する。東京下町の朝風呂は、江戸情緒の名残りもあって面白い。官越しの金は持たない顔のおやじ、手拭を頭にねじて浪花節をうなっているところへ、一日江戸っ子の田舎者が、熱いと叫んで水の栓を飛びつくこう。なり屋は、べらんめーで、どなり散らした。銭湯は我慢させる。気短か、せっかち、何も江戸っ子だけでなく、日本人一般の通有性である。それが独逸人と組んで、共に敢戦の苦林はなかったが、共に着眼の鋭敏性に於いては、他民族は世界的、特に日本の時計はその水準を抜く。気短かは腕を磨く。外国で一被品が好評を得た日本の時計が、新しい流行を生んだ。一流会社の重役諸公、国内の生活では外国時計、海外出張では国産にかえる。好品は見栄のメーカーとなる。話の糸口が銭湯では、見栄も脱衣場とかえねばならぬか。家庭では粗末な服装のマダムが、最上等の衣をいともしやかに、ゆっくり身につける。亭主の月給が知れた物を、お粗末な履物が証明する。銭湯は浮世のはきだめである。もの言えば唇寒しで、銭湯談義は尽くすまい。終戦直後、銭湯とゆけぬ困窮時、ドラムかんの風呂を作り、生後間もない赤ん坊を抱いて入る。その思出が、来春大学を出る予定の青年ぶりを見ると、よみがえって苦笑を誘う。（白雲）

第二九回　宗像大社歌会詠草

毎月十五日〆切　詠草到着順

福岡　江崎　琴子

年ごとにわが宿を訪ふ宗像は梅も香るになどか来なかむ

福岡　麻生　初栄

仕立てたる対のあわせをこに着せば戦死せる弟の照れのおもざし

小倉　伊豆　仁江

病みて尚主の帰りを迎えんと暗路に狗の動けすなり居し

田熊　小野角次郎

山近き谷間の我家静かなり霞流れて春はたけは

田熊　小野かをる

庭の梅にうぐひす来鳴くを病み夫に見せむと窓をひらと開きぬ

勝浦　永島　文子

海に生きる珍魚時と生持ち帰り魚拓象どりひそかに楽しむ

田久　立花　勇雄

復興の大方成りし神苑に神木の樹芽がきそめけり

東郷　藤崎　辰子

朝の陽にせっぐきのごと天窓の峭子を下る雪解けの水

田久　小方　実

四ツ塚の山も見ている宗像が神都一色立ち還える日を

深田　中野　節子

海鳥の鳴く音聞ける荒海のテトラポットに春さっきをり

田島　吉武　武雄

薬師堂等校道と言ひ開かせみぞれ降る日に納骨に行く

宗像　加藤富士子

とりよろう日稲の茂り神さびて鳥の声きく広き一かく

先岡　河村　久光

若草の萌え野原を見渡せば雨降るたびに色濃き増しつる

武丸　原田　リノ

赤き玉のごもも親ネックレス神縄乙女がかけてくれたる

宮田　片山　一

邦家に古代めきたる日銭の赤煉瓦の煙筒まさゆ

日の里　安部さつき

孫ら来て遊び馴れたるスベリ台冬陽の中にさびしくとあり

名残　竹原　圓

若草の萌え野原を見渡せば雨降るたびに色濃き増しつる

武丸　原田　リノ

赤き玉のごもも親ネックレス神縄乙女がかけてくれたる

宮田　片山　一

邦家に古代めきたる日銭の赤煉瓦の煙筒まさゆ

日の里　安部さつき

孫ら来て遊び馴れたるスベリ台冬陽の中にさびしくとあり

名残　竹原　圓

小鳥園孫がかけたるあとと思ゆ篠切る春の山に残れる

田熊　鷲津かつ代

老いづけるしかと登る那智山の道に幾たび息をととのふ

戸畑　藤井　孝子

日本晴れ車窓より眺む富士山に夢叶いてぞ吾はぞ乗む

宮田　北原　君子

亡き父の好みし霜柑の生態取りて御霊に供へむすし米を洗ふ

久留米　篠田太郎坊

今は亡き母の祖筒を整理しおればあまた出でさし手づくり人形

福岡　吉田　信夫

朝夕のラッシュアワーは人皆の対抗意識のさびしかりずや

福岡　吉田　春子

裏庭の椿の中に愛らしくわらび萌え出づ移り来し家

吉武　白木うめの

家事は姑にパートに出でゆく農婦等のバス待つ顔のはなやぎて見ゆ

津屋崎　麦野　時雄

五月空さく晴れわたり見はるかす大海原も紺碧の色

天野トモエ

鳥の声ふんだんに聞きつ草を取り名しらぬ小むしらさきはおく

徳重　石松やす子

我が身にも在すと聞かばわだつみの八潮路わけて母をたづねん

大井　安部　重郎

移し植えしれんげ躑躅も海棠も芽ぐみて日毎だのもしく伸ぶ

大井　安部　静子

籠持ちて見知らぬ人等車降り峡の山路を目おとしか

大井　吉田　和子

還暦を迎え夫のつよがりをまともにきくをり冥を植えつゝ

大井　吉田ますみ

玻璃戸越春の日さしの温くければ胸ぶらさまさ力ナリヤは鳴く

大井　木原ふさ子

旱春の霧色は寂し舊振タ片陰わずか雪も残りて

津屋崎　占部　由久

朝毎に二羽の鶏がたのしげに盛りの花に来てたわむる

香椎　桜井　ツ子

ガス管が赤く塗られて春浅き河口をつなぐ虹の形に

武丸　立石ろせ乃

川土手に放牧の牛のんびりとやや寒吹く青草を食む

宗像　中村　幸

むつかしき話終りて春まさ茶に茶柱立つ緑美しく

富山県　藤記　義治

谷川の水の流れは細々と絶ゆることなく先を争はず

江口　辻野　平

長畑のいもが歌いし孔大寺山ゑさとなるというが如しも

春祭りの季節

神人和楽のひととき

―各所で祭典盛大に斎行―

うららかな春の陽射しは、地上を種々の花で彩り、人々に喜々とした生気を与え、冬季間に萎縮した身心を解放する。全国各地で「桃の節句」「桜まつり」「花まつり」と祝いの行事や行楽行事が華々しく催され、各神社でも春祭に始まり結婚式に至るまで祝いの祭が執り行われた。

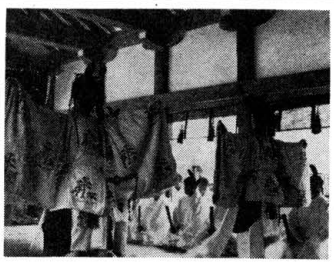
この時期は本格的な作付の時節でもある為、古くから人々はこの生成発動の好季を寿ぎと労働への積極的な意欲で迎え、五穀の豊穣、あらゆる産業の発展を祈り、ひいては国家鎮護と安心立命を祈念したものである。宗像でも恒例通り、総社春季大祭、沖中両宮春季大祭、摂末社の春祭りから各地の宗像神奉祭社等の大祭が盛大に斎行され、宗像の春を告げた。

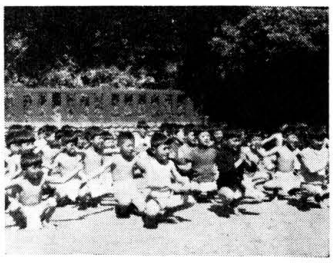
去る三月二日、宗像の春祭りの走りともいうべき、四ツ塚連峰の一山である孔大寺山（四九九米）の中腹に鎮座の孔大寺神社春祭が斎行され、当社より恒例により敝幣供が出た。

また三月十九日には当大社境内に祀る大社松尾神社の春祭が斎行され、北筑の金杜氏が参列し、各酒造場の自慢の新酒が捧げられ、神恩に感謝する敬虔な祈りが捧げられた。

其の後、桜のほころびとともに当大社総社の春季大祭を迎え、去る三月三十一日午後六時より同大祭宵祭が斎行された。

翌四月一日午前十一時より大祭第一日祭が斎行され、風俗舞、浦安の舞が地元青年と女子中学生奉仕により奉納された。





この大祭は古くより宗像の保存会と云われ、郡内外こぞって当大社に参拝し、やわらかな春の陽射しのもとで、宝物を拝し、神徳をしのび、神人和楽のひとときを過ごしたもので、人々に広く親しまれている。

この日も絶好の日和に恵まれ、境内は終始和やかでのどかな雰囲気が漂よっていた。また二日には大祭後午前十一時半より宗像護国神社の例大祭が斎行されたが、安部遺族会長始め全遺族の方々、来賓等が参列し護国の英霊のありし日を偲び、その神恩に感謝し、英霊安らかなれと祈られた。午後二時から拝殿にて小方百枝門下の献茶がなされ、茶の香は境内にまで漂い春ののどかさを一層深めた。神賑行事である奉納剣道大会は四日（日曜日）午前十時より行われ、一般剣士から豆剣士まで百数十名が参加して競われた。

優勝一般の部　宗像警察
小学高年部　津屋崎小A
〃下年部　玄海小
高校の部　福岡東高B

以上の通りの成績が納められた。

大祭が終るとすぐ、五日に徳山鎮座（出光徳山製油所外）の宗像神社春祭りが斎行され、十日には福岡市鎮座（新光石油（株）本社）の春祭が斎行された。一方、七日には東京に於いて出光興産（株）本社鎮座の宗像神社御遷座祭が斎行されるなど、各所で宗像大神を敬い奉る人々の敬虔な祈りが捧げられた。

次いで、九日、十日は沖中両宮の大祭が斎行され、大島内外から多くの崇敬者が参拝して賑った。

写真、最上から、総社春季大祭に於ける風俗舞模様。次が沖中両宮春季大祭奉納相模大会での豆力士たち。

写真上は東京の出光興産（株）本社での御遷座奉祝祭模様。

写真右は四月四日に斎行された新出光石油株式会社油槽タンク起工式（西公園下）。

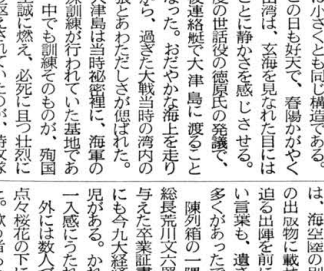
総計約一万二千キロリットルを容するタンク群が出きる。

桜花爛漫の下

回天烈士の碑をおがむ

―徳山港の大津島に―

去る四月五日、出光興産徳山製油所の春季大祭に、当大社の職員五名が奉仕した。春秋二度に、全所員が参列して、厳粛な祭儀が行われたことは、ここ十数年、祭りが欠かされたこともないが、雨に妨げられた例もない。



奉仕の職員は、出光石油化学工場内の宗像神社の祭儀を続いて執行、それが終ると、大浦油槽所内の高地に祭られる同じお社に向う。いずれも宗像大社本殿と、規模は小さくとも同じ構造である。

この日も好天で、春陽がかがやく徳山湾は、玄海を見なれた目にはまことに静かさを感じさせる。毎度の世話役の徳原氏の発議で、午後連絡艇で大津島に渡ることになった。おだやかな海上を走りながら、過ぎた大戦当時の湾内の緊張とあわただしさが偲ばれた。

大津島は当時秘密裡に、海軍の特殊訓練が行われていた基地である。中でも訓練そのものが、殉国の至誠に燃え、必死に且つ壮烈に繰り返えされていたのが、特攻隊人間魚雷。

学業を中断して、祖国の危急に起った学徒の多くが、歌った同期の桜は今や満開。回天の二文字を刻んだ石碑を仰ぎ、烈士の英魂にぬかずいて、感謝の心に悲壮感が沸くべ かって戦場を走り廻った思い出を持つ筆者も、万死に一生のない任務に就いたことはない。若い血潮のたぎる学徒戦士の心情は、とても掴むことは出来ない。

「大東亜戦争、年を重ねて苛烈を加へ」と書き出して、回天烈士百三十九名の氏名を刻んだ石碑が、別におかれている。ただ黙拝するのみ。記念館に歩みを進めて、感慨更に深いものがあった。

彼等が乗ったと同じ魚雷が館側に横たえてある。長き憧かに十五米足らず、この中央の操舵席に入る時は、彼等は既に英霊であった。湾内訓練の生活が、既に護国の神であった。

館内に列ぶ遺品や関係記念物の数々。彼等学徒戦士の遺書などは、海空隊の別を問わず、幾種かの出版物に載せられている。時々迫る出陣を前に、思うこと伝えたい言葉も、遺されたもの以外に、多くがあったであろう。

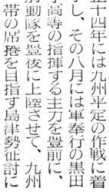
陳列箱の一隅に、九州帝国大学総長荒川文六署名の、出陣学徒に与えた卒業証書が目につく。筆者にも今九大経済学部に在学する男児がある。かれこれ思い合せて、一入感じられた。

外には数人づつの若人の群が、点々桜花の下に座って歓談していた。歌う者もある。然し、歌は学徒が歌い残したもの。祖国を愛するが故に、家族や後に国を背負う若者を思うが故に、彼等は黙々とこの湾内に訓練をつづけ、そして命のまに まに行って帰らぬ人間魚雷となった。

軍歌をあとに聞きつつ、彼等烈士がある日乗艦した出発路の説明を敬聴する。褪密保持のため作られた高塀のかげの小路、見やる一行は無言であった。（雲記）

宗像史談

宗像豊臣秀吉と宗像（一）



応仁の乱は、武備はもとより政治的実力を持たない権門に代って、管領・守護・地頭等の麾下に在った代官・目代・奉行等の実力者が抬頭する契機を作った。征夷大将軍の権威は、空名に落ちて側近の智略武力が幕府の政治を動かし、互に謀略の渦巻を起して室町体制の崩壊を早めていたのである。代々の将軍の擁立は、暗闇黙計の実力者の勝利の結果生まれ、将軍は傀儡化して、後には遠方の実力者に庇護を乞う有様ともなったのである。

史学はこれを下剋上の風潮と言うが、これはわが国史の上だけではない。勿論、室町幕府にのみ、下剋上の特色を指すわけにはいかない。鎌倉、江戸の幕府の末期、平安王朝政治の終末等が物語っているところである。

中央政権の威令が行われなくなると、地方も権門武力の相剋、部落の雄号の方が有名な異色の政治家は、華族廃止論に熱をあげ、華族たる多くの無能者は切り取り強盗の未裔を、優遇することは国家のために極めて有害であると結んで、盛んな拍手を浴びたことがあった。

ここに宗像との歴史上の関連を綴ろうとする秀吉は、尾張の中村在に生まれて貧農の家に育ち、少年の頃から各地を流転、教育も訓練も苦労の世渡りによる自弁、信長に目をつけて猿面冠者の才能発揮、遂に天下の権を握るに至ったのである。これは歴史家でなくても何人も知るところであるが、信長が本能寺で倒れるまでは自ら天下の覇者になろうとは、思っていなかったであろう。才能プラス幸運は、情勢の有利を加えて大飛躍した。然し、主殺後盗の集団の配下になった時期もあった彼は、今日の街のチンピラ不良とも比べて考えられる。

蜂須賀家は明治に華族となる所謂品位を備えた子孫を残したが、秀吉は晩年国事に於いては外征に失敗し、家事の面では秀頼盲愛から同族を亡い、華花一朝の夢に自失する手落もなかった。

彼は豊臣家とも云うべき東奔西走の青年時代は、よく情勢の判断を的確にし、人物登用の着眼も孝高等の指揮する主力を豊前に、別動隊を筑後に上陸させ、九州一帯の席巻を目指す島津勢征討に主目的をおいたのである。

当時島津忠長の率いる四万の大軍は、筑前に進攻し各地の大友宗麟及びその友軍を撃破し筑後にまで達していた。秀吉麾下の諸軍が到達する前に宗像勢の宿敵たる立花勢を囲攻撃して立花宗茂の実父、高橋紹運の死守する太宰府岩屋城は全滅し、秀吉と気脈を通ずる大友勢まで蠢き振わなかった。

神郷の伝統を護持して、四隣の強敵に優か数の軍勢を駆使して苦闘を続けた大宮司氏員は、大友立花連合軍を撃破してくれた島津勢の来着前に病死していた。氏員の死去による大宮司家の断絶、島津勢の後退と秀吉の九州平定軍を迎える大友勢の回復。この時勢は宗像にとってまことに不運な歴史の転廻が重なったのである。

翌天正十五年、秀吉自ら筑前に出陣するに至って、宗像は神領没収となり、秀吉の新体制の筑前領に加えられるに至った。初代の領主には、後に宗像大社拝殿を寄進した小早川隆景が任ぜられたのである。

年は後事に焦り苦しみ、果ては精神異状の傾きえもあったと携えされるのである。

運命の賽は、山崎の合戦に主君を裏切った明智光秀を破って秀吉の声価を高め、天下統一の端緒を開いた。或は攻め或は和して、天正十四年には九州平定の作戦に着手し、その八月には軍奉行の黒田孝高等の指揮する主力を豊前に、別動隊を筑後に上陸させ、九州一帯の席巻を目指す島津勢征討に主目的をおいたのである。

宗像大宮司　その三

神こうのみなと湊

(13)　楠早鳥作
福田長庵画

読経の声が木の間を通して聞え、香のかおりがあたりに漂ってきた。氏俊等と登る石段を踏みしめ踏みしめ、今後の成り行きを想い計った。弾正は思慮の深い武士ではあるし、よもや手違いを起すこともなかろう。亦船頭や船子等から事が露呈する恐れも、この葬儀によって未然に防いだ積りだ。

「儂の都合は何日でもよい。お前の船は葬儀の日から十日あまりの後に帆柱はずされ、船底の破れは繕われた。

「どうだ、これで又明国まで渡れるかな」

と弾正が番小屋を訪れてきた。

「いかいお話になりました。これなら何日でもお供が出来ましょう」

髭を撫でながら許六が答えた。

「儂の都合は何日でもよい。お前の考えを御考慮の上、御返事をお願い申す」

と語りふうっと大きく息をついた。

うつむいて弾正の話を聞いていた若者の目が弾正の傍に置かれている錦地くるまれた包の上にとまった時、これはそれを折に館より拝領した刀であると告げると、若者は宜敷ければ、その刀を拝見したいと願った。

刀は来太郎国行作、刃渡り二尺三寸、猪首切先きから発する光は若者の心を把えた。

「眼福でござった」

は永い人生の中で学んできていた神湊の浜に引き上げられた許六の船は葬儀の日から十日あまりの後に帆柱はずされ、船底の破れは繕われた。

「どうだ、これで又明国まで渡れるかな」

と弾正が番小屋を訪れてきた。

「いかいお話になりました。これなら何日でもお供が出来ましょう」

髭を撫でながら許六が答えた。

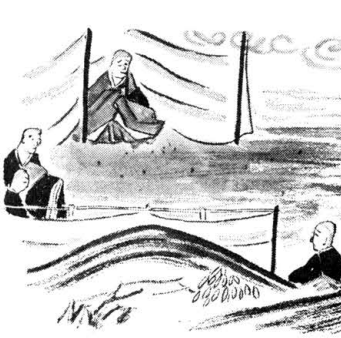
「儂の都合は何日でもよい。お前の考えを御考慮の上、御返事をお願い申す」

と語りふうっと大きく息をついた。

うつむいて弾正の話を聞いていた若者の目が弾正の傍に置かれている錦地くるまれた包の上にとまった時、これはそれを折に館より拝領した刀であると告げると、若者は宜敷ければ、その刀を拝見したいと願った。

刀は来太郎国行作、刃渡り二尺三寸、猪首切先きから発する光は若者の心を把えた。

「眼福でござった」



若者は、名残り惜しげに光芒を鞘に納めた。

若者も弾正もこの時、この刀が「五日ぐさきの大潮の日に船を下し発ちましょう」と話が決まるや許六はすばるを走らせ船子等を呼び集めた。そして、大潮の日に出帆し井上弾正を乗せ寧波に向うことを告げ、衰弱の激しい船子の替りに才市を連れて行くことを話した。また、すばるには帰国するまで、この番小屋で病人の看護をするように命じ、すぐさま船子等に出帆の仕度を急がせた。

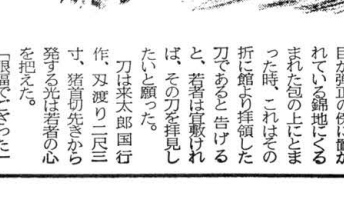
秋霖が続く中を走るもうに過ぎていった七月末、一振の刀を中にして若者と弾正の間に新たな絆ができようとしている。

×　×

導師の読経が完り一瞬、静寂となるや、許六が喝咽し、すばるが目をしばたいた。それを目の端に入れて氏俊は心中ひそかにつぶやきを手向けた。

あの男が死ぬとは許六には信じられなかった。許六の心にとらえている若者は如何なる災厄が来ようとも常に大きく羽ばたいて飛翔する不死鳥のような男であった。

しかし現実に彼は手厚く弔られた。何かおかしい。許六は何度かこの漠然とした疑問を弾正に問おうとしたが、一方心の中にそれを押し止めるものがあった。世の中には知らずに済ませることがよいこともある。それだけの知恵を許六



「五日ぐさきの大潮の日に船を下し次第しよう」

ろうとしていた。

ならられた船頭が船子等も一隅にたむまた弾正に卒いた。

家臣が拝別していた。

若者は手厚く弔られた。

船出の前日、弾正は大宮司館に若者を訪れた。

「何とも、この度は御面倒を惑はせます」

若者が深く恐縮すると

「いや、これがお互の因縁で御座ろう」

と言って弾正は笑った。

それから寧波のことや明の国状などの話を聞き、改まって、

「実は館より、先日、吾等の帰国後、貴公を婿に迎えよとお達しがあった。流浪の身とは言え、明国の名家の出自たる貴公を婿にとと吾三御辞退申し上げたのだがお聴きいれがない。若し留守中お館よりお話があった際は、吾等の考えを御考慮の上、御返事をお願ろう。」

宗像三宮（沖津宮・中津宮・辺津宮）
史跡指定官報に告示さる

○ 文部省告示第百十九号

文化財保護法（昭和二十五年法律第二百十四号）第六十九条第一項の規定により、次の表に掲げる記念物を史跡に指定する。

昭和四十六年四月二十二日

文部大臣　坂田道太

右は「官報」第一三三〇〇号（四月二十二日、木曜日）の十頁～十一頁にかけ掲載された文部省告示の一文である。

この告示をもって、当社三宮の史跡指定がなされた。

宗像神社の史跡指定については去る昭和四十三年三月に文化財保護委員会の文化財専門審議会第三分科会（記念物関係）に於て、当社三宮の境内を史跡にする旨答申されてよりの方、丸三年を経過した。この間、福岡県教育庁始め、地元関係者に至る間で種々検討、調整がなされていたが、この程、史跡指定区域内各位の御理解により去る二月二十六日に申請に至った。この経過は当誌先号に既報の通りである。

当社では、ただ今、未曾有の大復興事業が進捗中であるが、完成後のたたずまいが廻りの景観とともに末永く厳しく美しく保存されることは喜ばしい事である。

この度指定された区域は官報の告示にある通り、表で区域内の番地に至るまで掲載されているが、ここではその概略について御紹介する。

まず表は名称、所在地、地域の三段に分けられて、名称は宗像神社境内とし、所在地は福岡県宗像郡玄海町大字田島字上殿から始まり、地域には区域内全番地が記載されている。

字上殿は二三二一番～二三六八地までのほとんどである。以下は同字第三ノ下、二三三二～二三七二番までの大半。

同大字多礼字下保連、一〇三三番ノ一の外。

同大字在田字堀尻、五三ノ一、五三ノ二、五五ノ二、六三ノ一、六三ノ三、六四ノ一、六四番ノ二。

同大字田島字山下、二三七六～二三八一番ノ九まで。

同字大谷、一五〇三、一五〇四ノ一、一五〇四ノ二、一五〇五、一五〇六、一五〇七、一五一一、一五一二ノ一、一五一二ノ二、一五一五、一五一六、一五二八、一五二九番ノ一、各番地。加えて、〝右の地域に介在する道路敷、水路敷を含む〟とある。

同大島村字大岸、一八一一ノ一、一八一二番。

ここには〝右の地域に隣接する天は川河川敷を含む〟とある。

同字伊輿、二二九三、二二九六番。同字沖ノ島、二九八八番。

この沖ノ島は一番地しかないのでこれは沖ノ島全部ということである。

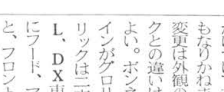
告示の表は以上であるが、当誌面をかり、関係各位並史跡指定区域内各位の御理解と御支援に対し厚く御礼申し上げる次第であります。

話題の新車をみる（年）
ニッサングロリアの巻

過去四、五年は実り、メーカーは減産体制に追い込まれることとなり、強弱メーカーの優劣がはっきりして来た。大メーカーは早目早目にモデルチェンジを行い購売意欲を盛り上げ、弱体メーカーは開発費を取り戻せぬまま、モデルチェンジも行えぬ現状で取り残され起死回生のため外国の大メーカーと業務提携して企業生残を計っている。

だが、資本の自由化に伴い、2リッター、クラスを撃する外国車勢の販売攻勢を予想すると、このクラスの車の販売が激烈を極めるだろうし、今後の課題となろう。それがあらぬか今回相つぐでトヨタ自動車のクラウン、日産自動車のセドリックと云う順にモデルチェンジが行われ、各々特徴ある風貌を消費者の眼前に表した。

今回はこれ等の中から セドリックと、スタイル、エンジン等同等のニッサン、グロリアについて紹介しよう。その背景リンス、グロリアとしてデビューした当時のグロリアは3ナンバーの車であった。そして独特のスタイルで需要層を持っていた。だが今何かにつけてコスト削減を計らねば経営が立ち行かぬ時代である。まして同クラスの車があるとすれば、何かにつけて共通にせねばは倒れにもなりかねまい。旧グロリアとの変更は外観のみであり、セドリックとの違いはほとんど無いと見てよい。ボンネット中央のプレスラインがグロリアの場合二本、セドリックは二本グロリアGX、GL、DX車にはボンネット前端にフード、マスコットのあることと、フロント、グリルとヒリヤ、フイニッシュの飾りがセドリックと違うくらいの車である。エンジンは水冷直列6気筒OHCである。



中央中体育館など
教育施設相ついで竣工

予ねて着手されていた都内宗像町玄海町等で教育施設が相ついで竣工、明るいニュースを伝えている。

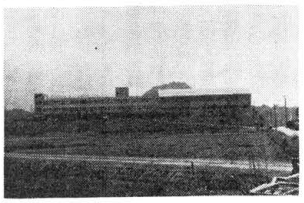
宗像町立中央中学校の体育館は去年八月に着工したが、本年早々に竣工し、早くも図館で始めて卒業生の送り出と、新入学生の迎えがなされた。

四年越の念願が成就したものだけに、校区代表で作られた建築促進委員会の方々学校関係者、父兄の喜びは深い。児童も大変喜んでいるが、夏を控つく八十八夜の頃ともなれば思い出すのであろうか、〝プールがほしいや〟という明るい声に苦笑させられた。

一方、玄海町では玄海小学校内に建設中であった町立幼稚園が完成。赤い屋根のおもちゃの国のような景観を呈していて楽しい。

園児も大変お気に入りのようである。また、同町地野、岬統合小学校の第一期工事も竣工しているが、これでは全生徒を収容できぬ為、本年度中になされる第二期工事竣工をまって来年四月一日に引越されるとのこと。

いずれも近代的設備が完備しているだけに、教育都宗像にふさわしい教育が期待される。



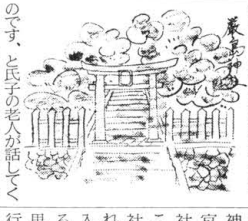
神郡宗像
摂末社を訪ねて（二）
厳島神社

鐘の岬より約二十分の乗船で、地ノ島に着く、人口約五百人のこの島は、漁業の島である。この地ノ島字泊に御鎮座の厳島神社をたずねて見た。渡海船、第二玄海丸が泊の波止場に入ると長さ二十メートルくらいの桟橋があり約百戸くらいの人家が密集している部落がある。ここが泊である。この集落の中に石鳥居が立ち、五十余段の石段が続く。それを昇ると玄海灘が目下に広がり、神湊、鐘岬をむすぶ松原の緑と白砂が、空の青と海の青を二分して走っている。

又勝島と大島が霧の中に浮かび見えた。境内には、森俊神社、高殿神社、天照皇大神宮、天満神社、恵比須神社が祭られている。

この厳島神社には田心姫命、市杵島姫命、滝津姫命の宗像三女神が祭られ、由緒によると、創立年月不詳。明和六年丑九月十三日神殿二十四日尚殿再建成就す。例祭九月十五日とある。

拝殿の絵馬も古く、年月の定かでないものが多い。境内に五個の力石があり、現在でも青年が時々利用するらしく、この石はピカピカ光っていた。本殿は間もりがひどいらしく彫刻等にしみが見えた。五月頃から夏の間に釣人が多くなり、心ない者が神社あらすのです、と氏子の老人話してくれた。筑前国続風土記附録の条に、厳嶋社、神殿方二間、拝殿二間半三間、祭礼九月十五日、石鳥居一基、奉石鐘崎住人辻丹後、産神なり。奥の嶋の神を祭ると、本宮司氏郷正平年中の社記には、此社白浜にありと見えたり。後にここに移せしにや。社内に御高所社といふあり。いかなる神を祀れにや。祭礼九月十一日。鐘崎の入江氏奉祀す。――と記している。



里人の話しによると十月十五日に行われるこの神社の御座は、泊と白浜との二部落が一年交代で御座当番にあたる。故あって現在でも泊と白浜とでは御座の料理が異っていると話してくれた。一度この御座を拝見したいものである。

吉武の高山氏から
今年初の献木

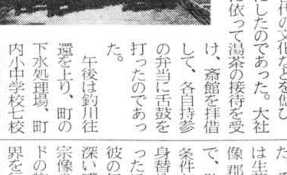
宗像大社では、予ねて切復興事業に併せて大社への献木を呼びかけていたが、これに応えて宗像町吉武の高山徳七郎氏から今年初の献木がなされた。

氏は過去、村長、県議を勤められたお方で、退かれてからも大社の事から村のこと、また宗像郡の宗像会の事と多方面に亘って尽力されている篤実家である。

此の度の献木は当家の庭一十数年愛育された〝サルスベリ〟〝千両〟〝モミヂ〟〝ツガ〟などがなされた。高山氏御夫妻は、これらの献木が末永く残り大社様の境内が美しく色どられれば有難いことですと申されていた。

大社では早速、植栽工事中の心字池ほとりに植栽し、神前に御奉告申し上げた次第である。

大社並に復興期成会当局はこの大量の献木に深く感謝申し上げるとともに、今後も篤志からの心ある献木をお待ちする次第であります。

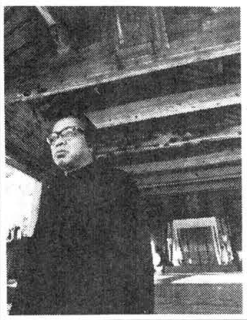


松本清張氏一行参拝

去る四月七日、作家として名高い、松本清張氏、佐藤愛子氏、文芸春秋関係者等の一行が取材の為来社参拝された。

松本清張氏は極最近にも取材にこられていたので二度目。当社職員の説明を熱心に聞かれ、記念撮影などに応じられていた。

（写真は当社拝殿前で）

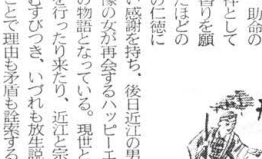


吉武老人クラブ
町内視察見学の記

老人クラブ吉武長生会員三十名は我々も見聞を広め勉強せねばと三月二十六、七日の両日にわかれて、貸切バスに分乗し、宗像町諸施設の視察をなし老人の意気を示した。

先ず東部児童館前を午前九時に出発、石丸より新しく開通した宗像バイパスに入り、整備、拡張されつつある森林都市の景観を眺め、九州一の大規模ゴルフ場と称される国際カントリーに着く、支配人の親切な案内に耳を傾け、際しなく続く芝生にゴルファーの動きを眺める。次いで日本住宅公団開発の東郷台の里団地に行く。中央の高台に登り、目下宅地の売出し中だという整備された宅地造成の広大さ、将来この地に四万人が住むだろうとの説明に驚く。やがてバスは、ここの給水源になるという大井ダムに進む、十数億の経費を投じ造成されたというダムは、満々と水を湛えている。将来は町民の観光地としても整備されるであろう。

やがて宗像大社に着く、新装なった大祈願殿で、長寿、交通安全の祈願祭を斎行。終って蓑津権宮司より懇切な挨拶を受け、更に宝物館を拝観、神の島学術調査に依り発掘された三百余年前の祭祀遺跡の優雅な美術品などの陳列に、日本古代の文化などを偲び、感激を新にしたのであった。大社の御厚意に依って湯茶の接待を受け、斎館を拝借して、各自持参の弁当に舌鼓を打ったのであった。



午後は釣川往還を上り、町の下水処理場、町内小中学校七校の給食を一手に引受ける給食センター見学。有線放送の施設に入るや交換手諸嬢の呼吸もかせぬ働きぶりに感嘆する。次いで宅地の売出し中だという整備された宅地造成の広大さ、将来この地に四万人が住むだろうとの説明に驚く。やがてバスは、ここの給水源になるという大井ダムに進む、十数億の経費を投じ造成されたというダムは、満々と水を湛えている。将来は町民の観光地としても整備されるであろう。

やがて宗像大社に着く、新装なった大祈願殿で、長寿、交通安全の祈願祭を斎行。終って蓑津権宮司より懇切な挨拶を受け、更に宝物館を拝観、神の島学術調査に依り発掘された三百余年前の祭祀遺跡の優雅な美術品などの陳列に、日本古代の文化などを偲び、感激を新にしたのであった。大社の御厚意に依って湯茶の接待を受け、斎館を拝借して、各自持参の弁当に舌鼓を打ったのであった。

午後は釣川往還を上り、町の下水処理場、町内小中学校七校の給食を一手に引受ける給食センター見学。有線放送の施設に入るや交換手諸嬢の呼吸もかせぬ働きぶりに感嘆する。次いで宅地の売出し中だという整備された宅地造成の広大さ、将来この地に四万人が住むだろうとの説明に驚く。やがてバスは、ここの給水源になるという大井ダムに進む、十数億の経費を投じ造成されたというダムは、満々と水を湛えている。将来は町民の観光地としても整備されるであろう。

館に帰着、楽しく有益であった一日の旅を語らいつつ家路についた。（立石記）

宗像伝説　其の一〇
亀の霊験　その二

次も宗像にゆかりの亀放生にまつわる因縁話である。主人公は近江の国甲賀郡の人で、時代の設定はない。貧しい妻が織りあげた布一反を、籾にかえて出を作ろうと思い立った。彼はその布をまず限って、魚はとれないで、一匹の亀がかかった。貴重な布一反を無駄にする結果とはなるけれど、彼の慈悲心は亀を捕まえるに忍びずこれを放してやった。その放生は妻のひどい非難を浴びて、遂に夫は心痛のあまり病に倒れたのである。

その後に冥土の物語がついている。冥土の役所で一人の小僧が現われ、生前助けた亀はわが化身と名乗り、彼を救ってくれた。彼は傍に居た若い娘の助命も乞い、これも許された。その娘は生前は宗像郡の者で、助命の条件として身替りを願ったほどの彼の仁徳に深い感謝を持ち、後日近江の男と、亀の縁起を名にするのは鶴も同様だが、女性の場合は反対に鶴が多い。

亀千代・亀太郎・亀吉などの男性の名は、江戸時代の文書にも見られる。女性の名には、今も昔もあまり用いなかったであろう。「おかめ」と呼んでは、いささか具合が悪い。長寿の象徴として、亀の縁起を名にするのは鶴も同様だが、女性の場合は反対に鶴が多い。

豊玉姫が大亀に乗って、海を渡つてきたという神話時代から、海神のお使いとして漁民は特に信仰が強かった。玄海灘の荒波が洗う宗像沿岸には、海亀が浜辺にあがると、酒を飲ませて放つ風習が残っている。童話に知られる昼れの兎と、おそくとも孜堂々と着実に努力する亀とのかけくらべ、宗像人の進取の気象に富む点と思い合せる時、今日に伝わらぬ亀の霊験談も昔は少くなかったであろう。

亀の甲を焼いて占う亀卜では、その詳案も難しい。（了）

宗像大社歌会
俳句作品集（101）

競馬にかかわりもなく揚雲雀　久留米　篠田太郎坊
野も山も饅棚引き里は春　田熊　小野角次郎
句を衣に一人も楽し桃開く　田熊　小野かをる
野づら吹く風のつめたし春浅く　福岡　麻生　初栄
ふるさとの鳩鳩恋し春寒く　東京　小浦　太平
宗像の三社巡りや今朝の霜　富山　藤記　義治
船ゆれて行くや玄海春の潮　田島　有吉　唐水
春一番思い出する離愁かな　小倉　伊豆　湧泉
春暁の空やけて居り風さわぐ　福岡　入江　柳江
職去りて夫のうたたね春炬燵　東郷　有吉　春子
若布刈る鎌の刃先の潮光り　津屋崎　井浦　良介
嘲や一郡氏子の神の森　大井　安部　重郎
春潮は眩しくなきて旅平戸　大井　吉田　和子
緋梅の香雨に沈みて旅情濃し　大井　吉田ますみ
野海棠咲きさだまりて昼しづか　大井　木原　ふさ子

出光佐三一問一答シリーズ ㊲

働く人の資本主義

まず、この大地域小売業は、中間搾取をする投機者および無用の問屋を排斥するということで、今日の言葉でいえば流通革命ですね。したがってこの販売形態は、消費者と生産者にとって流通段階の非常な合理化であり、効率化、能率化であるといえます。ところが、それを実行する出光自身としては、非常な努力と苦労を要するように思われる。社会的には効率的、能率的な形として望ましいものであるが、一企業経営的にみれば、むしろ非常に手数のかかるものといえませんか。『人間尊重五十年』をたんねんに続けてみますと、出光が生産者から消費者へという理念を実行したがためにぶつかった苦しみと、それを人間の鍛練と努力と指導によって克服していかれる姿が、随所に出ているような気がします。

その二、三をここで拾ってみますと、

「生産者より消費者への商売は、理想でありまた現在としては誰もこの制度は疑わないのであります。」

宗像神社沖津宮祭祀遺跡
昭和四十四年度調査報告

大麻畑の谷を越え、急坂を上って沖津宮附近の祭祀遺跡に出る。更に落葉に埋れ崩れかかった細い道をたどって頂上の燈台に上る。下りは通称奥の院と呼ぶ巨岩の下より祭祀遺跡の東側を流れる黄金谷を下る。巨岩累積する間を這い登りすべり落ち、原始林の中を悪戦苦闘して海岸にたどりついた。

三日は夜半より吹き出した雨まじりの風の中を前日と同じく柏崎の船は大島を出港不能との無線連絡が聴信経由で入ったので、調査を続行することにした。午前中は黄金谷の巨岩群を踏査し、午後は大麻畑の旧陸軍守備隊兵舎跡を調べ、谷間の巨岩群を登って沖津宮にたどりつき、午後四時過ぎ全員疲れ果て、五号遺跡前の路上で休憩した。携行した電波金属探知機は度々試験を行なったが、何分にも試作品のため使用法にもなれず、調子も悪かった。たまたまこの休憩中に前回の調査に参加したいう宗像神職が巨岩の蔭で行なわれた古代の祭祀形式について語りはじめた。その話にひかれるように、又小野の五号遺跡で試験をしてみてはとの勧めもあり、松見が探知機の調整をやり直し、何かに魅せられるように道路すぐ傍らの岩陰の地表に探知機のリンクを当てた。しばらく探知を繰返していたが、突然探知機のメーターが反応を示し、レシーバーに大きな音がした。全員ハッとして腰をあげ、日陰が更に一個現われ、レシーバーを取り音を確認した。数ケ所の中で最も反応の強い個所に吉村が竹ベラを突刺したところ、腐蝕土の下に黄金谷の巨岩群を踏査し、午後は量範囲の概略を決める。四日は離島の予定であったが、前日来の風雨はますます強くなり、遂に迎え船は大島を出港不能との無線連絡が聴信経由で入ったので、調査を続行することにした。午前中は黄金谷の巨岩群を踏査し、午後は大麻畑の旧陸軍守備隊兵舎跡を調べ、谷間の巨岩群を登って沖津宮にたどりつき、午後四時過ぎ全員疲れ果て、五号遺跡前の路上で休憩した。携行した電波金属探知機は度々試験を行なったが、何分にも試作品のため使用法にもなれず、調子も悪かった。たまたまこの休憩中に前回の調査に参加したいう宗像神職が巨岩の蔭で行なわれた古代の祭祀形式について語りはじめた。その話にひかれるように、又小野の五号遺跡で試験をしてみてはとの勧めもあり、松見が探知機の調整をやり直し、何かに魅せられるように道路すぐ傍らの岩陰の地表に探知機のリンクを当てた。しばらく探知を繰返していたが、突然探知機のメーターが反応を示し、レシーバーに大きな音がした。全員ハッとして腰をあげ、日陰が更に一個現われ、レシーバーを取り音を確認した。数ケ所の中で最も反応の強い個所に吉村が竹ベラを突刺したところ、腐蝕土の下に黄金谷の巨岩群を踏査し、午後は量範囲の概略を決める。四日は離島の予定であったが、前日来の風雨はますます強くなり、遂に迎え船は大島を出港不能との無線連絡が聴信経由で入ったので、調査を続行することにした。午前中は黄金谷の巨岩群を踏査し、午後は大麻畑の旧陸軍守備隊兵舎跡を調べ、谷間の巨岩群を登って沖津宮にたどりつき、午後四時過ぎ全員疲れ果て、五号遺跡前の路上で休憩した。携行した電波金属探知機は度々試験を行なったが、何分にも試作品のため使用法にもなれず、調子も悪かった。たまたまこの休憩中に前回の調査に参加したいう宗像神職が巨岩の蔭で行なわれた古代の祭祀形式について語りはじめた。その話にひかれるように、又小野の五号遺跡で試験をしてみてはとの勧めもあり、松見が探知機の調整をやり直し、何かに魅せられるように道路すぐ傍らの岩陰の地表に探知機のリンクを当てた。しばらく探知を繰返していたが、突然探知機のメーターが反応を示し、レシーバーに大きな音がした。全員ハッとして腰をあげ、日陰が更に一個現われ、レシーバーを取り音を確認した。数ケ所の中で最も反応の強い個所に吉村が竹ベラを突刺したところ、腐蝕土の下に黄金谷の巨岩群を踏査し、午後は量範囲の概略を決める。四日は離島の予定であったが、前日来の風雨はますます強くなり、遂に迎え船は大島を出港不能との無線連絡が聴信経由で入ったので、調査を続行することにした。午前中は黄金谷の巨岩群を踏査し、午後は大麻畑の旧陸軍守備隊兵舎跡を調べ、谷間の巨岩群を登って沖津宮にたどりつき、午後四時過ぎ全員疲れ果て、五号遺跡前の路上で休憩した。携行した電波金属探知機は度々試験を行なったが、何分にも試作品のため使用法にもなれず、調子も悪かった。たまたまこの休憩中に前回の調査に参加したいう宗像神職が巨岩の蔭で行なわれた古代の祭祀形式について語りはじめた。その話にひかれるように、又小野の五号遺跡で試験をしてみてはとの勧めもあり、松見が探知機の調整をやり直し、何かに魅せられるように道路すぐ傍らの岩陰の地表に探知機のリンクを当てた。しばらく探知を繰返していたが、突然探知機のメーターが反応を示し、レシーバーに大きな音がした。全員ハッとして腰をあげ、日陰が更に一個現われ、レシーバーを取り音を確認した。数ケ所の中で最も反応の強い個所に吉村が竹ベラを突刺したところ、腐蝕土の下に

沖ノ島

二、調査生活の記録

1、第一回予備調査

（昭和四十四年四月二日～七日）

このたびの予備調査は測量・資材・設営の準備を目的とし、本会より理事出光泰尚、宗像大社より宇都宮・斎藤両神職、鹿島建設九州支店より日隈・吉村・岩本、出光興産より小野、出光美術館より松見・末松（直）が参加した。松見は新たに考案した電波金属探知機を試験のため携行した。

四月一日大島に渡り中津宮に参拝し、翌二日未明漁船にて大島港を出港し、荒浪にもまれて十時すぎ沖ノ島に到着した。直ちに慣例の海水による「みそぎ」を行なって中食、少憩後沖津宮に参拝し、引続き地形の探査を行なう。船着場より上にある社務所横より原始林を分けて西南端の柏崎の鼻・時化知らずに到り、そこより東北進して

人為的に動かして、その変動の率を利益する制度になっておりまして、生産者より消費者等強調しまして、一種の小売業者と見なし大商店の中間入りも出来ない。又相場の変動によって利益を取ることになっておって、消費者への販売の如きは、一種の品さばきにすぎず、これにより利益を取る組織には出来ておる出光商会が投機で利益せず、一般小売者と対抗競争することは、経費倒れとなるのは当然である。投機商にはなれず小売者には適せず進退両難に陥ったというのはこの時でありまして、愈々経営上窮地に陥りました。

消費者への配給設備として倉庫、船舶等諸種の設備と多量の商品の貯蔵、売掛金の固定のため、ますます金融難に陥り、危機に瀕したことは毎年のことであって、悪戦苦闘の二十年を経過しました。（中略）当時の財界各方面の仕組みは、出光商会には適しないように出来ておりまして、私どもは当時の経済社会に対する反逆者であり異端者であったのであります。しかしながら正しき主張と不断の努力は次第に各方面の認むるところとなり、全国的に流出の取引が生産より消費者主義に移り、大阪式卸問屋が遂に没落するに至るまでに二十年の星霜を経たのであります。一営業の理想においてさえ二十年を要するのであります。吾々は大いに肚をきめてかからねばなりません。この長き間の悪戦苦闘は、よく店員を鍛錬し強化し、自信力を持たしむるに至ったのであります。」

出光　そこにも書いてあるように、出光の創業当時は、商売とは投機や買い占め、売り惜しみによって金もうけする時代ですから、〝生産者から消費者へ〟などということは、いわば書生論であって、誰も相手にしてくれなかったものです。だから、この実行の苦しみは並たいていではなかった。ことに、消費者に直面するため、商売が伸びれば伸びるほど〝黄金の奴隷となるな〟などと言って、金持の金は借りない。資金欠乏の苦しみは言語に絶するもので、私が自殺したという噂は何回となく立ちましたね。

それからここの大地域小売業は人間がしっかりしていないと経費倒れになって駄目なんです。いわゆる人間尊重、尊重される人間でなければ、この理念は実現できない。その意味で営業方針である〝生産者から消費者へ〟と人間尊重とは不可分の関係にありますね。

質問　「我が四十五年間」にこういう文もありますよ。

「吾々出光が実現している大地域小売業の基礎は人間尊重にあるとして初めて小売業は成り立つ。大地域小売業の社会的使命は大なるとともに、その経営は一般事業中の難事である。各人が個人商店の主人同様の熱意をもち努力をなすことである。この点においては学校教育を受けていない人がすぐれているが、長続きがしない、また小成に安んずる傾きがある。この点もう利害の問題でない、ということで互いに大家族となって一致団結していこうというようになったわけです。

話を本筋にもどすと、出光の若い連中がいかに働くことに徹底しているか、この例でもはっきりわかるでしょう。

質問　そうしますと、出光の直営だけでやったほうが能率的だけど、特約店の人びとが出光の大家族のなかにとけこんできたから、能率的という面は少しくらい犠牲になっても仕方がないということですか。

出光　そうじゃない。特約店（これを出光では販売店と言って、出光の支店出張所と同等に扱っている）の人が出光の大家族主義のあり方に共鳴されたということは、出光の「みなが仲よくして和の力を発揮すること」を体得したということですね。言いかえれば、人の和をもって能率を発揮することを知ったということです。

だから、出光の〝生産者から消費者へ〟という理念は、大家族主義のひろがりによって、消費者直売プラス多数の販売店をまで含めて一まわりも二まわりも大きな形で実現されつつあるということですね。販売店の若い人たちが三、四万人いますが、この人たちが出光の若い連中の指導によって、出光と同様に立派に育っていますよ。

質問　そうしますと、この大地域小売業は尊重すべき人間でなければならない、そういう難事であるけれども、一方では、そういう尊重すべき人間を育てるには絶好の場であるということも言えますね。出光さんが「出光は人間修養の道場」であるとよく言われますが、その具体的な場が、この大地域小売業形態であると言えそうですね。

出光　そうです。

× × ×

〔新任者紹介〕

当社は昨年度後期から本年度にかけて新しい職員が就任致しましたので、当誌面をかり御紹介申し上げます。

今後宜しく御指導御鞭撻の程お願い致します。

大慈弥　成武

オオゾミシゲタケと読む。昭和十四年十二月、大分県宇佐市は横綱二葉山関出生の隣村に産声を発した。

元気の良い産声であったそうだが以後大事な成長期が食糧難の時期で発育を逸し、小柄であるとの説明。

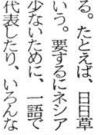
色が少々黒く健康色なのは野球をしていたからとのこと。

四十二年県立四日市高校から八幡大学の経営経済学部に進学。

宗像薮庵先生百話

ニトベギク

つづき



南方
華やかなりし頃

宗像太郎坊

マラリアの予防のために、アノフェレス蚊にさされないようにしなければならない。そこで蚊取線香を作ることを考えた。これも線香はなく、渦巻にした。その原料に表題のニトベギク Tithoniadiversifolia Gray を使った。これは中米が原産であるがスマトラではあちこちに野生している。この雷と花を乾燥して使うのである。やはり形成のためタビオカを混じ、小さい穴から押し出し、出て来るのを、渦巻の形に彫った板の溝の上に落して行く。これは一応成功した。

ニトベギクのことを現地人は、ブンガ・マタ・ハリ bunga・matahari といっている。ブンガ花という意味であるが、彼等は放線状になった花弁の花は、すべてこういうのである。たとえば、日日草も太陽花という。要するにネシア語は語数が少ないために、一語で多くの物を代表したり、いろんな意味を持たしていたりする。その場所と雰囲気によって適当に判断しなければならない。ネシア人にどうしてこんなに言葉が少ないのかと試いたら「沢山あったんだがオランダ人が隠した」と面白い返事をした。こんなことにまでオランダに敵愾心を持っている。マタハリ（太陽）といえば大昔の人間はみな太陽を神様として尊敬崇拝していた。簡単にいえば人類はみな太陽教の信徒であったのである。日本人は昔南方から来たというが、仲宗根美樹のよく唄う「阿里屋ユンタ」に「サー夢の沖縄」度はおいて、サーヨイヨイ、海に満月ヤレホニ島に花。マタハーリの、チンダラ、カミ、サマよ」というのがある。最後の行は立派なマレー語（ネシア語）である。即ち、マタハーリ matahari 太陽チンダラ chintaraは愛する人は憧れる。カミ kami われわれ。サマ sama同様に。の意味で「太陽はわれわれを同じように愛して下さる」の意味だと思う。ついでにいうが天照大神もマレー語だという説がある。アマテラスは非常に立派な（オーミは分らない、誰かご教示ください）台湾の蛮社の言葉はこれは立派なマレー語で、今出仕、修業し神明奉仕の道を選ぶ。

父君の希望と説得で高良大社に

其の後、小倉の八坂神社に奉仕し、昨年十月十五日、当社に就任した。

趣味は野球、音楽。酒は一滴ものまずタバコも喫わぬ静かな好人物。しかし意志げんこ。時々とはすりコークが大笑をさそう。何時の間にかミニ坊やの愛称を頂戴している。

神島　定

カミシマサダムと読む。

昭和二十年型で、戦後のニューモデルといったことで発育優良、大型である。同年の二月京都郡苅田町に出生。

昭和四十三年国学院大学の神道科を卒業。宗像大社に奉仕したかったが縁があったため箱根神社。

其の後、東京大神宮に奉職。本年四月一日付をもって念願の宗像大社に奉職。

× × ×

父が「定によお前のこれからの生涯をおれに預けてくれ、俺の思い通りになってはくれまいかと云い、神職になれ宗像大社に御礼の奉仕をと熱望され、この道に入りました」とのこと。人物温厚誠実、学生時代野球をやり名サードとしてならした。

趣味は音楽と野球。音楽は特に雅楽が好きで、大学時代に強く興味を持ち、卒論も祭儀と雅楽の関係をものしたほど。

同君の巨体から吹奏する笛の音は見事なもの。同君自身は卒論の主眼と雅楽は私自身の生涯の勉強にしたいと意思。

其の動機を聞くと、「私の父が戦争中、戦車隊として出兵しましたが、大いなる危機に直面し、その都度信仰していた宗像大神に助けられたとのことで、今日有るも全く大神の御神徳のお陰と感謝して居ります。ある日、父が

× × ×

のマレーシア、インドネシア地域の人間が来たことは間違いない。沖縄も阿里屋ユンタの唄のように、マレー語を使う人間がいたと思われる。すると奄美大島、さらに九州と渡って来たことはかなり確かに考えられる。言葉もマレー語に似たのが沢山ある。たとえば飲むは ミノム minum、飯は Nasi、沢山は サワ sawah の如しである。

ジャワ出身の女スパイに、有名な「間諜マタハリ」がいたが、戦時中、アンボン島に、ルマ・マカン・マタハリ（太陽食堂）というのがあり、混血のアンボン女がマダムをしていた。東京駅の名店街に開業している吉田昇平先生はこのマダムを「二〇歳くらいで片言ながら英語もオランダ語も喋るなかなかのインテリ。目もと口もとが特に美しい。皮膚の色はちょうど、ひきたての山芋をたっぷり入れて揉み廻したような、とろっとした艶と弾力を見せている」とうまく表現している。アンボン人の黒に白人の白が混じるとすばらしい張りのある艶が、年頃のホルモン兵に醸し出されるのであろう。

× × ×